

形容動詞を語基として持つ「-的」の語基制約*
—自然と自然的のレジスター別コロケーションにおける
分析を中心に—

金 嚙 泳**

< 目 次 >

I. はじめに	IV. 自然・自然的
II. 先行研究と問題点の所存	V. おわりに
III. 研究の枠組み	

Key Words : 的(teki), レジスター(Register), コロケーション(Collocation), 語基制約(Restriction of radix), 接尾辞(Suffix)

< 要 旨 >

本稿では、レジスターによる「自然」と「自然的」のコロケーションにおける分析を行うことで、既に存在している形容動詞にわざわざ「的」をつけることによってまたもや形容動詞のような用法を持つ「-的」を作らなければならなかった理由から始め、形容動詞と形容動詞を語基としてもつ「-的」という言葉の特徴などを明らかにした。

まず、形容動詞「自然」はレジスターという面では主に口語文で使われ、その用法の面では述定(叙述)用法が好まれる。その反面、擬似形容動詞「自然的」は「自然」と逆に、レジスターという面では主に文語文で使われ、その用法の面では比較的装定(限定)用法が好まれる。

続いて、「自然」は形容動詞の中でより名詞に近い形容動詞であって、その名詞的な特性によって「-的」の語基として許容され易くなる。また、口語文における「自然」

* 이 논문은 2015년도 동덕여자대학교 연구비 지원에 의하여 수행된 것임(연구번호: 201503700). This study was supported by the Dongduk Women's University grant(No. 201503700).

** 동덕여자대학교 일본어과 조교수, 일본어학 전공

が、比較的により純粹な形容動詞の用法として使われていて、これをもって擬似形容動詞である「自然的」より形容動詞「自然」が口語文に多く見られることも説明できた。

以上のような考察を踏まえて本稿では、名詞的な特性を持つ「自然」のような形容動詞は「自然的」のようにそれを語基として持つ「-的」とレジスターや用法(装定・限定)という面でそれぞれの役割を分担し、補い合っている関係にあることを明らかにした。

I. はじめに

日本の近代に新しく生まれた漢語は数少なくないが、その中でも本稿で主に扱う「-的」という言葉の使用が著しい(e.g. 客觀的, 比較的, 自然的など)。このような「-的」という一連の言葉には以下の(1)のように、その語基に大部分の形容動詞語幹と特定の漢語名詞を語基として許容しないなど、「-的」の語基にはある制約がある。

- (1) a. 静かな夜 / *静か^的(な)夜
 b. 下手な人 / *下^手(な)人
 c. 愉快な話 / *愉快^的(な)話 (金2010:1)
 d. 必死な顔 / *必死^的(な)顔

つまり、^的の連結を原則として拒んでいるものに、いうところの形容動詞語幹があつて、「-的」は形容動詞の中でより名詞に近い形容動詞に限っては語基として採用しやすい。しかし、それは絶対的な基準ではない傾向であつて、現代日本語の「-的」には、慣用的に形容動詞語幹をその語基として使う旧用法も共存している(金2010:11)。

本稿では、このような「-的」の中で形容動詞語幹をその語基として採用している「自然的」と、その語基でもある形容動詞「自然」との比較を行うことによって、両語においてどのような差が存在するのかを明らかにしたい。そうすることによって、以下の(2)のように、既に存在している形容動詞にわざわざ「^的」をつけることによってまたもや形容動詞のような用法を持つ「-的」を

作らなければならなかった理由が少しでも分かるようになると思われる。

- (2) a. 如何にしばしば理知のための理知にこの自然な道が見失われているであろう。 『朝鮮とその芸術』柳宗悦(2014)
- b. またそれは自然的なものであると云っても、外的世界に属せずして、 … 『ゲートに於ける自然と歴史』(2012), 554p

II. 先行研究と問題点の所存

前節で述べたように、形容動詞語幹でありながらも的と結合し、「-的」を形成する語がないことではない。このような「-的」の語基制約に関して、藤居(1957)は以下の(3)のような用例をあげ、「的」は慣用的に語基と結合して、規則的ではないと述べた。同氏は、「-的」の連結にはルールがないといい、これは「無規則連結性」であるとも述べた。

- (3) a. 進歩的 *散歩的 b. 美的 *真的 *善的

しかし、まず一部例外¹⁾として言われている「自然」「健康」などが「-的」の語基として成立可能であった原因は、なにより発生期における「-的」が形容動詞ではなかったからである(金2009:86)。明治期における「-的」の用法の変遷を考慮すると、「-的」が形容動詞のような役割を果たすようになったのは結果論的な話であって、発生期における「-的」は形容動詞として想定して使用され始めたのではない(金2010:3)。従って、発生期において一部の「-的」が形容動詞の語基を有することができたのである。

- (4) 「-的」は、徐々に現代日本語における形容動詞のような用法に近づき、形容動詞の扱いをされるようになった。従って、「形容動詞語幹+的(自然的など)」の

1) いわゆる形容動詞の語幹には的はつきにくい。現代語でのつぎうる形容動詞の語幹は、通俗・永久・変則・経済・健康・神秘・自然・正常・正統などの諸語の範囲に限られるようだ。(山田1961:247)

語構成が可能であったり、また、語基がその性格が非状態性の名詞らしいものである場合、「-的」は終止用法をもたない(堀口1992)など、「-的」は純粹な形容動詞ではなく、擬似形容動詞であるといえよう。(金2009:89)

つまり「-的」の語基制約には、慣用的な用法と、後に付加された形容動詞のような用法の成長による形容動詞語幹を拒む性質が共存していると考えた方が適切である。もちろん、以下の(5)のように、後で発生した形容動詞のような用法(e.g.「-的+ナ」連体修飾用法)の数が多くなり、それに圧倒されて形容動詞のようなものが主な用法とされ、形容動詞語幹が「-的」の語基として拒まれるようになったこともあると思われる(金2010:10-11)。

(5) a. 翻訳書における「形容動詞語幹+的」の用例

1) 明治元年~19年: 36例中9例 → 25%

2) 明治40年~大正5年: 34例中0例 → 0%

b. 「-的」の連体用法の変化

「-的+な(る)」と「-的+被修飾語」の用法は、明治30年代になると「-的+の」用法を上回る。また、明治40年代になると、「-的+な」は「-的+なる」用法を上回って、現代日本語における「-的」の用法に近づいていく。

金(2009:89)

以上のように、今まで「-的」の語基制約に関する研究は比較的活発に行われてきたが、形容動詞を語幹として持つ「-的」とその語基になる形容動詞との比較を通じて、それぞれの位相や特徴、両方における差などについて実証的な検証を行った研究は管見の限りあまり見当たらない。従って本稿では、形容動詞語幹でありながら的と結合できる語、その中でも「自然・自然的」における以下の(6)のような項目に関して考察を行いたい。

(6) a. レジスター別(文語・口語), 「自然・自然的」の出現頻度

b. レジスター別(文語・口語), 「自然・自然的」のコロケーション

そうすることによって、疑似形容動詞である「-的」の特徴と「-的」の語基制約或いは形容動詞を語基としてもつ「-的」の特徴や存在意義などがより明

らかになると思われる。また、レジスターによる両語の用法の差という側面も確認できると思われる。

Ⅲ. 研究の枠組み

1. 調査対象

本稿では、以下の(7)のようなテキストを主な研究対象としたが、それに加えて明治期における合計310件(翻訳書84件・非翻訳書226件)のテキストにおける「-的」の用例も調査対象とした。その詳しいテキスト目録は金(2011)を参照すること。

- (7) a. 国立国語研究所(2008)「BCCWJ領域内公開データ(2008年度版)」
- 白書：全1500サンプル・約500万語
- b. 国立国語研究所(2008)「BCCWJ領域内公開データ(2008年度版)」
- 書籍：全13,587サンプル・約1300万語
- c. 青空文庫²⁾(<http://www.aozora.gr.jp>)の小説編：8,370,720語(約840万語)
- d. 国立国語研究所(2008)「BCCWJ領域内公開データ(2008年度版)」
- Yahoo!知恵袋：45,725サンプル・約500万語
- e. 名大会話コーパス³⁾：2名から4名の話者による約100時間の雑談を収録、文字化したデータ(会話参加者は女性161名、男性37名)・2,318,134語(約230万語)

2. コロケーション

本題に入る前に、形容動詞「自然」と「自然的」を比較するに際して使われる概念であるコロケーションに関して簡単に整理してから論を進めたいと思う。まず、先行研究におけるコロケーションにおける定義は以下の(8)のよう

2) 収録作品数は、日本語用例・コロケーション抽出システム『茶漉』のウェブページ参考。
<http://telldev.cla.purdue.edu/chakoshi/aozora-chuui.html>(検索日：2017.2.12)

3) 参加者は、日本語用例・コロケーション抽出システム『茶漉』のウェブページ参考。
<http://telldev.cla.purdue.edu/chakoshi/meidai-chuui.html>(検索日：2017.2.12)

である。

- (8) コロケーションとは、語と語の間の結びつきのことである。例えば、「ひんしゆくを買う」における「ひんしゆく」と「買う」が非常に強く結びついていることは、直感的に分かる。実際、国語辞典の「ひんしゆく」の項には、「ひんしゆくを買う」という表現が通常記載されている。 深田敦(2007:161)

ところが、上記の(8)における「ひんしゆくを買う」のように連結性が強い語は、一般に多く言われている「イディオム(idiom)・慣用句」とどう違うだろうか。これに関して、鷹家秀史(1998)などはコロケーションをイディオムと自由結合と比較しながら説明した。

表1. イディオムと自由連結

分類	用例	意味(訳)	意味の透明度	参考
イディオム	kick the bucket	死ぬ	不透明 opaque	個々の語の意味を総合しても、意味に辿りつけない。
自由結合	kick the door	ドアを蹴る	透明 transparent	個々の語の意味から全体の意味を把握することができる。

- (9) イディオムと自由結合は二者択一的なものではなく連続体(cline)を成しているものと考えられ、コロケーションはイディオムと自由結合の間にあるものとされています。
- a. rancid butter : rancidはその直後にbutter/eggなどの特定の語のみをとる。
 - b. expensive butter : expensiveは殆どどのような名詞をも直後に置くことができる。 鷹家秀史(1998:111)

つまり、rancidとbutterおよびexpensiveとbutterの間の相互の「予測性(predictability)」に顕著な差が認められるので、本稿では前者をコロケーション、後者を自由結合とみなす。

2.1 コロケーションの中心概念

中本(1997)によると、コロケーションの中心概念は「頻度」「共起制限」「意味

の特殊化(比喩化)」ということになるという。

- (10) a. 頻度：一定のテキスト(またはコーパス)の中での相対的な頻度。
e.g. flush a toilet
 - b. 共起制限(collocation restriction)：「類義語との置き換え可能性」を調べること
によって明らかになる。
e.g. commit / perpetrate fraud
e.g. commit / *perpetrate suicide
 - c. 意味の特殊化：語における第一語義の意味ではなく、特殊な意味で捉えられ
ること。
e.g. catch a bus
- 中本恭平(1997)⁴⁾

2.2 コロケーションの数値化

鷹家秀史(1998)は、コロケーションを取り扱う場合には、語と語の連結の「頻度」、とりわけ「相対的な頻度」「予測性」が重要な指標になり、これを数値化できればコンピューターでの取り扱いが便利になると述べた。深田敦(2007)は、コロケーションに関連する統計指標として「MI-score」と「t-score」が代表的であると述べたが、その計算方法は以下のものである。

(11) MI-score(Mutual Information value)の定義と計算方法

二つの単語の共起関係(相互の結びつき)の強さを表す指標の一つ。相互情報量とも言う。具体的には、ある単語ともう一つの単語とが共起する確率と、それぞれが個別に生起する確率との比である。実際の計算では、正規化するためにコーパス全体の総単語数をかけ、その対数(底は2)をとる。

$$\text{MI-score} = \log_2 \frac{\text{ある単語A とB の共起頻度} \times \text{総単語数}}{\text{単語A の頻度} \times \text{単語B の頻度}}$$

値が大きいほど結びつきが強いことを表す。

『応用言語学事典』(2003:637)

4) 鷹家秀史(1998)による孫引き(112-113)：中本恭平「コロケーション再考-頻度、共起制限、意味の特殊化」『英語表現研究』第14号、日本英語表現学会、1997

(12) t-score の定義と計算方法

二つの単語の共起関係(相互の結びつき)の強さ(の確信度)を計る指標の一つ。MI-scoreと比べ、単語の頻度も考慮に入れており、単語の頻度が低い場合でも適切に判断できると言われている。

$$t\text{-score} = \frac{\text{観察値の平均} - \text{期待値の平均}}{\sqrt{(\text{分散} \div \text{総数})}}$$

「観察値の平均」を「二語の共起確率」, 「期待値の平均」を「それぞれの語個別の確率をかけたもの」とする。分母の部分の分散は、二語の共起の分散値であるが、二語の共起確率自体が非常に小さいため、分散の代わりに確率を用いても事実上変わらないということがわかっている。ゆえに、計算式は、次のようになる。

$$t\text{-score} = \frac{\text{共起確率} - \text{個別の確率をかけたもの}}{\sqrt{(\text{共起確率} \div \text{単語総数})}}$$

実際の計算では、確率は、頻度数÷単語総数であり、すべての項に単語総数が入っているため、計算を簡単にするために以下の式を使う。

$$\frac{\text{共起頻度数} - \frac{\text{個別の頻度数をかけたもの}}{\text{単語総数}}}{\sqrt{\text{共起頻度数}}}$$

『応用言語学事典』(2003:638)

t-scoreとMI-scoreは、前者がコロケーションの有無の確からしさを表す統計量であるのに対して、後者はコロケーションの強弱を表わすという点で異なる。つまり、MI-scoreは「意味的特性」を示す値で「慣用語・ことわざ・複合語・専門用語」など「意味的に特徴をもつ語」がリストアップされる⁵⁾。一方、

5) Cobuild*direct*のCollocation Samplerで‘cat’を入力すると‘scaredly’ ‘meowing’などが上位に現れる。鷹家秀史(1998:114)

t-scoreは「共起頻度」に関する値で「前置詞・人称代名詞・限定詞」など「文法構造を示す語」がリストアップされる⁶⁾。

IV. 自然・自然的

1. 発生期における「自然的」

まず、発生期における「自然的」の様子を確認するために、金(2011)の明治期テキストデータ(以下、明治期テキストデータ)における「-的」の用例を検索してみたところ、用例は18件、その詳しいデータと用例は以下の表2と(14)ようである。

表2. 明治期における自然的の用法

年代	用法	装定(限定)				計	述定 (叙述)	その他	計
		連用	連体						
			ニ	ナ	ノ				
明治20年代		1	0	2	1	4	0	0	4
明治30年代		0	0	1	2	3	0	0	3
明治40年代		2	1	0	0	3	2	6	11
計		3	1	3	3	10	2	6	18

- (14) a. …孝道も佛教に庇保されてけり。日本の風俗は國家の結合も家族の親睦も遙に支那より篤ければ、忠孝の行も自然的に篤し。
 「倫理の改良(一)」久米邦武『太陽』明治28年5号
- b. …けれども千八百九十六年に神秘的な『沈鐘』を書いたハウプトマンは千八百九十九年に自然的な『馭者ヘンセル』を書いてゐる…
 「文芸上の自然主義」島村抱月『近代評論集I』明治41年、283p
- c. …自然的及び道德的の書惡に反抗する…

6) CobuildirectのCollocation Samplerで‘cat’を入力すると‘a’ ‘your’などが上位に現れる。鷹家秀史(1998:114)

『自助論』畔上賢造, 明治39年, 482p

- d. …英國の有りする自然的便利と政治的利益とによりて…

『自助論』畔上賢造, 明治39年, 148p

- e. …前に掲げた六要素中の自然的といふこと、すなはち人間の巧偽に反して自然の醇樸に還るといふ傾向がやがて此の自然主義であると共に、情緒的といひ、理想的といひ、中古的といふが如き諸要素も同時に存在してゐるのがロマンチズムの特色である…

「文芸上の自然主義」島村抱月『近代評論集』明治41年, 274p

今回の明治期テキストデータにおける「自然的」の用例はそれほど多くはないが、「自然的」は語幹連用(e.g. 比較的美味しい)と「-的+助動詞」連体用法を除いてほとんどの用法に対応したことが分かる。その中でも、(14e)のように、「自然的」は述定(叙述)用法も有する。

- (15) a. …ははははは、土屋君の観察は何処までも生理的だ。

『破戒』島崎藤村, 明治39年

- b. 奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、その結果として自分も嫌われているのだと断言した。 『ころ』夏目漱石, 大正3年

- c. 大学にいる時分の私は、ことに先生に接触した私は、遠くから兄を眺めて、常に動物的だと思っていた。 『ころ』夏目漱石, 大正3年

- (16) a. 精神的な鍛錬 / *その鍛錬は精神的だ。

- b. 社会的な地位 / *彼の地位は社会的だ。

堀口(1992:74)

- c. 愉快な話 / 彼の話は愉快だ。

- d. 可能な目標 / その目標は可能だ。

ところが、「自然的」以外にも(15)のように、「-的」は述定用法(叙述)を有することが確認できる。しかし、(4)と(16)のように、堀口(1992)は語基がその性格が非状態性の名詞らしいものである場合、「-的」は終止用法をもたないと記述したが、それに関しては今後の課題としたい。

2. コーパスにおける自然・自然的

続いて、形容動詞「自然」と擬似形容動詞である「自然的」における以下の

(17)のような考察を通じて、擬似形容動詞「-的」に関してさらに詳しい考察を行いたいと思う。ちなみに、(17)は(6)と再言及である。

- (17) a. レジスター別(文語・口語), 「自然・自然的」の出現頻度
- b. レジスター別(文語・口語), 「自然・自然的」のコロケーション

本稿では調査対象になるテキストを大きく文語文と口語文に分けるが、書籍・白書・青空文庫を文語文と暫定し、日本語自然会話書き起こしコーパス(旧名大会話コーパス, 以下, 旧名大会話)は口語文とする。また, Yahoo知恵袋は両方の中間的な性格を持つテキストであると言われているが, この点に関しては下って検証を行うことにする。このような基準に従って, それぞれのレジスターにおける「自然・自然的」の用例に関する検討を行うことにする。

2.1 レジスターにおける「自然・自然的」の出現頻度

各レジスターにおける「自然・自然的」の出現頻度を整理すると, 以下の表3のようになるが, これをもって確認できることはまず, 「自然」と「自然的」共に①文語文(書籍・白書)>②>③口語文の順の出現頻度を見せるという点である。それは, 品詞や意味が何であれ, 両語とも漢語である故に比較的③口語文より①文語文における出現頻度が高くなるだろうという一般的な予想とあまり変わらない結果であった。その一方で②Yahoo知恵袋の場合, 自然発話ではなく一応文語文の形を持ってはいるが, 「自然」と「自然的」の出現頻度からみると, どちらかという③口語文に近い性格を持っているテキストであることが再確認できる。

表3. 各レジスターにおける自然と自然的の出現頻度

レジスター		①文語文			②	③口語文
		書籍	白書	計	Yahoo 知恵袋	旧名大 会話
総語数(約)		1,300万	500万	1,800万	500万	230万
総語数比率		5.65	2.17	7.83	2.17	1
自然	調整前	8,582	2,108	10,690	634	74
	調整後	1,519	971	2,490	292	74
自然的	調整前	161	58	219	3	0
	調整後	28	27	55	1	0

凡例 1) 最もコーパスの希望が小さい名大会話コーパスを基準とし、各レジスターにおける比率を調整。

- 2) 総語彙比率と調整後における数値は四捨五入。
- 3) 「自然・自然的」が名詞である場合は除外。
- 4) 限定用法では「自然的環境」など直接限定用法はサンプルリングが必要であるが、今回は除外した。
- 5) 「茶漉」による青空文庫における検索結果を表4では除外したが、今後最近のデータを反映して追加することにする。

ところが、ここ表3で最も注目すべき点は、③口語文における「自然的」の用例が一例もないことと比べて「自然」の場合は74例も見られ、「自然的」の方が①文語文に偏っていることである。これは品詞或いはその意味より「的」を付するという「形式」によってレジスターにおける偏りが発生することを意味する。つまり、「自然」と「自然的」は互い入れ替えられる単純な類似語の関係であるより、それぞれの役割を分担し、補い合っている関係に近いということを示唆する。言い換えると、同じく形容動詞のような機能を果たしているとしても、形容動詞とそれを語基として持つ「-的」の間にはレジスターによってその用法が分けられるし、形容動詞にわざわざ「的」を付することにも意味があることも裏付けられることになる。

2.2 レジスターにおける「自然・自然的」の用法

続いてレジスター別に「自然」と「自然的」の用法に関してより詳しく調べてみたが、その詳しい結果は以下の表4のようである。

表4. 各レジスターにおける「自然」と「自然的」の用法

レジスター		文語文			口語文	
		書籍	白書	計	旧名大会話	
総語数(約)		1,300万	500万	1,800万	230万	
総語数比率		5.65	2.17	8.83	1	
自然	装定用法 (ナ・ノ)	2,014	181	2,195	18	
	叙述用法 (ダ・デ)	430	5	435	5	
自然的	述定用法 (ナ・ノ)	65	2	67	0	
	叙述用法 (ダ・デ)	4	0	4	0	
調整後	自然	装定用法 (ナ・ノ)	356 23.4%	83 8.5%	439 17.6%	18 24.3%
		述定用法 (ダ・デ)	76 5%	2 0.2%	78 3.1%	5 6.8%
		調整後 総出現数	1,519	971	2,490	74
	自然的	装定用法 (ナ・ノ)	12 42.9%	1 3.7%	13 23.6%	0 0%
		述定用法 (ダ・デ)	1 3.6%	0 0%	1 1.8%	0 0%
		調整後 総出現数	28	27	55	0

凡例 1) 最もコーパスの希望が小さい名大会話コーパスを基準とし、各レジスターにおける比率を調整。

- 2) 総語彙比率と調整後における数値は四捨五入。
- 3) 「自然・自然的」が名詞である場合は除外。
- 4) 限定用法では「自然的環境」など直接限定用法はサンプルリングが必要であるが、今回は除外した。

表4の結果をみると、「自然・自然的」は共に①文語文と②口語文共に装定(限定)用法が主な用法であって、述定(叙述)用法が比較的少ないことが分かる。ところで、口語文における「自然的」の用例が少な過ぎるため、文語文に限って「自然」と「比較的」を比較してみたが、「自然的」における装定用法の比率が「自然」より高かった(23.6 : 17.6)ことで、「自然」より「自然的」の方が比較的装定用法に適していることが確認できた。

2.3 「自然・自然的」のコロケーション

最後に、レジスター別「自然」と「自然的」における分析に移りたいが、既に表4で確認されたように「自然的」は口語文には一例も現れなかったため、「自然」のコロケーションを中心に考察を行いたい。そうすることによって「-的」の語基として許容される「自然」という形容動詞の特徴が明らかになると思われる。

2.3.1 文語文における「自然」のコロケーション

まず、文語文の中で青空文庫における「自然」のコロケーション分析結果は以下表5-1と(18)のようである。

表5-1. 青空文庫における「自然」のコロケーション ①tスコア

コーパス総語数= 8370720 スパン語数=4735 kwコーパス頻度=920					
形態素	tスコア	MIスコア	コーパス頻度	スパン頻度	期待頻度
に	12.091	3.73	271006	394	154.0101
の	11.166	3.41	402385	471	228.6715
と	8.670	3.64	159597	219	90.6974
が	6.526	3.30	174698	189	99.2792
は	5.596	3.05	243920	222	138.6174
主義	4.300	8.59	448	19	0.2546
ので	4.136	4.78	8640	26	4.9100
天然	4.118	12.03	37	17	0.0210
な	3.614	3.26	59020	62	33.5405
足	3.439	6.00	1994	14	1.1332

から	3.287	3.20	55254	56	31.4003
力	3.150	5.84	1912	12	1.0866
ば	2.959	3.66	17953	25	10.2025
中	2.871	3.92	11409	19	6.4836
さ	2.861	3.73	15101	22	8.5818
する	2.802	3.59	18073	24	10.2707
より	2.798	4.36	6213	14	3.5308
自然	2.644	6.31	920	8	0.5228
派	2.609	8.54	171	7	0.0972
美し	2.602	8.27	206	7	0.1171
なる	2.431	3.88	8631	14	4.9049
彼女	2.402	4.43	4231	10	2.4044
科学	2.400	7.99	215	6	0.1222
状態	2.367	7.26	355	6	0.2017
大きな	2.255	5.13	1819	7	1.0337
に対する	2.227	5.83	959	6	0.5450
きわめて	2.216	9.15	80	5	0.0455
判る	2.213	8.95	92	5	0.0523
に対して	2.164	5.47	1230	6	0.6990
結果	2.080	6.21	615	5	0.3495
調子	2.076	6.17	630	5	0.3580
彼	2.064	3.42	13624	16	7.7424
微笑	2.041	5.89	766	5	0.4353
離れ	2.022	5.75	843	5	0.4791

- (18) a. 1番：そこでは彼は自然の冷酷さからしばらく逃れうるのだ！
 b. 180番：生物は、自然の猛威の前に、すっかりひれ伏してしまったのだ。
 c. 1番：しかし、シルバー・トラクターを結成した事は自然な成り行きだっただろう。
 d. 21番：あなたが未亡人の病気のマラリアであることにお気づきになったかどうかは、いまここで問わぬことにして、嘔吐と下痢のあることをさいわいに亜硫酸を利用しようと企てられたことは、もっとも自然な推定ではありませぬか。

前述したように、t-scoreが大きければ大きいほど、その語と「自然」の共起が単なる偶然である確率が低いことを示す。また、t-scoreには「文法構造を示す語」がリストアップされる。従って、文語文における「自然」は、連体修飾・形容詞限定用法では「ノ」>「ナ」順に共起する確率が高いということが分かる。つまり、「自然」は「自然の○○」のような用法が最も多く見られるということで、前述したように<「-的」は形容動詞の中でより名詞に近い形容動詞に限っては語基として採用しやすい(金2010:11)>ということを裏付けることである。これはまた、「自然的」と比べて比較的述定用法が多く見られるという2.2節の記述と一致するものである。

表5-2. 青空文庫における「自然」のコロケーション ②MIスコア

コーパス総語数= 8370720 スパン語数=4735 kwコーパス頻度=920					
形態素	tスコア	MIスコア	コーパス頻度	スパン頻度	期待頻度
天然	4.118	12.03	37	17	0.0210
きわめて	2.216	9.15	80	5	0.0455
判る	2.213	8.95	92	5	0.0523
主義	4.300	8.59	448	19	0.2546
派	2.609	8.54	171	7	0.0972
美し	2.602	8.27	206	7	0.1171
科学	2.400	7.99	215	6	0.1222
状態	2.367	7.26	355	6	0.2017
自然	2.644	6.31	920	8	0.5228
結果	2.080	6.21	615	5	0.3495
調子	2.076	6.17	630	5	0.3580
足	3.439	6.00	1994	14	1.1332
微笑	2.041	5.89	766	5	0.4353
力	3.150	5.84	1912	12	1.0866
に対する	2.227	5.83	959	6	0.5450
離れ	2.022	5.75	843	5	0.4791
に対して	2.164	5.47	1230	6	0.6990
大きな	2.255	5.13	1819	7	1.0337

ので	4.136	4.78	8640	26	4.9100
彼女	2.402	4.43	4231	10	2.4044
より	2.798	4.36	6213	14	3.5308
中	2.871	3.92	11409	19	6.4836
なる	2.431	3.88	8631	14	4.9049
に	12.091	3.73	271006	394	154.0101
さ	2.861	3.73	15101	22	8.5818
ば	2.959	3.66	17953	25	10.2025
と	8.670	3.64	159597	219	90.6974
なく	2.016	3.63	8825	12	5.0152
する	2.802	3.59	18073	24	10.2707
彼	2.064	3.42	13624	16	7.7424
の	11.166	3.41	402385	471	228.6715
が	6.526	3.30	174698	189	99.2792
な	3.614	3.26	59020	62	33.5405

- (19) a. 261番：あの手合いの書くものには天然自然の人間が出ていやす。
 b. 357番：高慢というのでもなく謙遜というのでもなく、きわめて自然に落ち着いてまっすぐに腰かけたまま、柄の長い白の琥珀の parasol の握りに手を乗せていながら、葉子にはその貴婦人たちの中の一人がどうも見知り越しの人らしく感ぜられた。

『青空文庫』・『茶漉』日本語用例・コロケーション抽出システム

MI-scoreは、「天然」>「きわめて」>「判る」>「主義」>「派」の順になったが、これは「自然」とのコロケーションの強い順に対応している。つまり、文脈上「意味的に特徴をもつ語」を確認することができる。

2.3.2 口語文における「自然」のコロケーション

続いて、口語文(旧名大会話)における「自然」のコロケーション分析であるが、以下の表6-1のようである。

表6-1. 旧名大会話コーパスにおける「自然」のコロケーション①tスコア

コーパス総語数= 2318134 スパン語数=339 kwコーパス頻度=74					
形態素	tスコア	MIスコア	コーパス頻度	スパン頻度	期待頻度
に	4.828	5.47	20502	29	2.9982
の	2.994	3.96	36235	18	5.2989
な	2.499	4.45	14347	10	2.0981
が	2.477	4.18	19033	11	2.7834
中	2.398	7.76	870	6	0.1272
こう	2.086	6.09	2301	5	0.3365
を	2.024	4.72	7124	6	1.0418

表6-1をみると、口語文におけるt-scoreは、連体修飾・形容詞限定用法としての主な共起が表5-1の文語文とあまり変わらないことが分かる。しかし、口語文の場合、他の共起より「に」>「の」>「な」との共起の傾向が明確で、上位に位置していて、いわゆる名詞と共起しやすい「が」「を」は数値が低く、そもそも「は」はリストにない。つまり、口語文における「自然」が、比較的純粋な形容動詞としての用法として使われたことが分かる。それは擬似形容動詞である「自然的」より形容動詞「自然」が口語文に多く見られることも説明できる。

また、MI-scoreでは以下の表6-2のように、多様な漢語が多数を占めていた表5-2と違った様子が確認できる。

表6-2. 旧名大会話コーパスにおける「自然」のコロケーション②MIスコア

コーパス総語数= 2318134 スパン語数=339 kwコーパス頻度=74					
形態素	tスコア	MIスコア	コーパス頻度	スパン頻度	期待頻度
中	2.398	7.76	870	6	0.1272
こう	2.086	6.09	2301	5	0.3365
に	4.828	5.47	20502	29	2.9982
を	2.024	4.72	7124	6	1.0418
な	2.499	4.45	14347	10	2.0981
が	2.477	4.18	19033	11	2.7834
の	2.994	3.96	36235	18	5.2989

法(装定・限定)という面でそれぞれの役割を分担し、補い合っている関係にあると判断する。

もちろん、口語文における「自然的」の分析、また「自然・自然的」以外の形容動詞に対するより幅広い考察が必要とされる点では課題は残っているが、それらに対しては今後の課題として扱っておきたい。

【参考文献】

- 遠藤織枝「接尾語『的』の意味と用法」、『日本語教育』53号、東京大学国語国文学会、1984、pp.125-138
- 影山太郎編『レキシコンフォーラム-Lexicon forum』No1、ひつじ書房、2005、pp.1-293
- _____『レキシコンフォーラム-Lexicon forum』No2、ひつじ書房、2006、pp.1-283
- 金崎泳「「-的」の日本語化」、『2009年度春季大会予稿集』、日本語学会、於武庫川女子大学、2009、pp.85-92
- _____「「-的」の語基制約」、『日本語学研究』第27輯、韓国日本語学会、2010、pp.1-13
- _____「「-的」の日本語化」、『日本語学研究』第30輯、韓国日本語学会、2011、pp.105-126
- _____「明治期における「-的」の用法の変遷—連体修飾用法を中心に—」、『国語語彙史の研究』31、国語語彙史研究会、2012、pp.261-280
- 小池生夫編集主幹『応用言語学事典』、研究社、2003、pp.1-972
- 齊藤俊雄・中村純作・赤野一郎編『英語コーパス言語学:基礎と実践』、研究社、2005、pp.1-325
- 齊藤俊雄他共訳『コーパス言語学:言語構造と用法の研究』、Douglas Biber・Susan Conrad・Randi Reppen著、南雲堂、2003、pp.1-275
- 鷹家秀史・須賀廣共著『実践コーパス言語学:英語教師のインターネット活用』、桐原書店、1998、pp.1-222
- 高橋勝忠「「的」論考」、『英文学論叢』49号、京都女子大学英文学会、2005、pp.1-22
- 深田敦「日本語用例・コロケーション情報抽出システム『茶渡』」、『日本語科学』特集 コーパス日本語学の射程、国書刊行会、2007、pp.161-172
- 藤居信雄「「的」という言葉」、『言語生活』71号、筑摩書房、1957、pp.71-76
- 三木清『ゲーテに於ける自然と歴史』、青空文庫、2012、pp.1-26
- 柳宗悦『朝鮮とその芸術』、Kindle本、2014、pp.1-137
- Douglas Biber・Susan Conrad・Randi Reppen, *Corpus linguistics :investigating language structure and use*, Cambridge University Press, 1998, pp.1-300
- Vincent B.Y. Ooi, *Computer Corpus Lexicography*, Edinburgh University Press, 1998, pp.1-224

国立国語研究所「BCCWJ領域内公開データ(2008年度版)」「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の一部, 石井正彦蔵(非公開), 2008

『茶漉』, <http://telldev.cla.purdue.edu/chakoshi/public.html>(検索日: 2017.2.12)

『ひまわり』, <http://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php?%C1%B4%CA%B8%B8%A1%BA%F7%A5%B7%A5%B9%A5%C6%A5%E0%A1%D8%A4%D2%A4%DE%A4%EF%A4%EA%A1%D9>(検索日: 2017.2.12)

『日本語自然会話書き起こしコーパス(旧名大会話コーパス)』, <https://nknet.ninjal.ac.jp/nuc/templates/nuc.html>(検索日: 2017.2.12)

■ 접수일: 2017년 02월 20일
심사개시: 2017년 03월 16일
심사완료: 2017년 04월 12일
게재결정: 2017년 04월 20일

〈要旨〉

‘형용동사’를 어근으로 갖는 ‘-적의’에서 나타나는 제약에 관한 연구
—‘자연自然’과 ‘자연적自然的’의 레지스터별 콜로케이션 분석을 중심으로—

본고에서는 레지스터에 따른 ‘自然’과 ‘自然的’의 콜로케이션 분석을 수행하여, 기존의 형용동사에 的을 추가하여 다시금 형용동사와 같은 용법을 가진 ‘-的’를 생성해야만 했던 이유를 시작으로, 형용동사와 형용동사를 어기로 갖는 ‘-的’의 특징 등을 명확히 했다.

우선, 형용동사 ‘自然’은 레지스터라고 하는 측면에서는 주로 구어에서 사용되며, 용법이라고 하는 측면에서는 서술용법이 선호된다. 반면 의사형용동사인 ‘自然的’는 ‘自然’과 반대로 레지스터라고 하는 측면에서는 주로 문어에서 사용되며, 용법 측면에서는 상대적 으로 한정용법이 선호된다.

그리고 ‘自然’은 형용동사 중에서도 명사에 가까운 형용동사로, 이와 같은 명사와 같은 특성에 의해서 ‘-的’의 어기로 사용되기 쉽게 된 것으로 볼 수 있다. 또한 구어에서 찾아볼 수 있는 ‘自然’이 비교적 더욱 순수한 형용동사의 용법을 갖는데, 이를 통해 의사형용동사인 ‘自然的’ 보다 형용동사인 ‘自然’을 구어에서 더 많이 찾아볼 수 있는 사실 또한 설명할 수 있다.

본고에서는 위와 같은 고찰을 기반으로, 명사와 같은 특성을 가진 ‘自然’과 같은 형용동사는 ‘自然的’와 같이 형용동사를 어기로 가진 ‘-的’와 ‘레지스터’와 ‘용법’이라고 하는 차원에서 각각의 역할을 분담하는 서로 상호보완적인 관계에 있다고 하는 점을 분명히 했다.

A Study on the root-restriction of the ‘-teki的’ with an ‘adjectival noun’ as a root
—Analysis on collocation of Shizen自然 and Shizen-teki自然的 by different registers—

In this paper, we performed the collocation analysis of registers on Shizen自然 and Shizen-teki自然的. In this paper, we clarified the reason why we had to create a ‘-teki的’ with the same usage as an ‘adjectival noun’ by adding ‘teki的’ to an ‘adjectival noun’ already existing, and the features of an ‘adjectival noun’ and a ‘-teki的’ with an ‘adjectival noun’ as root.

First, the ‘adjectival noun’ Shizen自然 is mainly used in spoken registers, and the narrative method is preferred. On the other hand, the ‘similar adjectival noun’ Shizen-teki自然的 is used in the written register as opposed to Shizen自然, and relatively modification usage is preferred.

And Shizen自然 is a ‘adjectival noun’ close to a noun among the ‘adjectival noun’, and it can be seen that it is easy to use it as a root of the ‘-teki的’ because of the characteristics like noun. In addition, Shizen自然 which can be found in the spoken registers has a relatively more pure usage of the ‘adjectival noun’, which explains why the ‘adjectival noun’ Shizen自然 rather than the ‘similar adjectival noun’ Shizen-teki自然的 is more common in verbal sentences(spoken registers).

In this paper, based on the above considerations, it is clarified that the ‘adjectival noun;Shizen自然’ with the same characteristics as nouns has mutually complementary relations that share the roles of a ‘-teki的;Shizen-teki自然的’ with an ‘adjectival noun’ as root from the point of view of ‘register’ and ‘usage’.